

DIVEプロテニス 上演台本

『メイド・イン・ジャパン』

土橋淳志

登場人物

撮影者 男、このドキュメンタリーの撮影者

店長 押井礼二、男、三十代、メイドカフェ『ゆーとぴあ』の店長

しのぶ 三宅忍、女、三十代、現役のメイド長

あかね 日高茜、女、二十代、元メイド

りょう 藤波涼、女、二十代、元メイド、一人称は「僕」

林原 林原恵一、男、三十代、常連客のサラリーマン

諸星 諸星渉、男、三十代、常連客のブローカー

月 (ユエ、女、三十代、家事代行業に勤める元中国人

あの人 (女、二十代、島根県の神社の娘

白バージョン

五代祐一 男、二十代、大阪の露天商

黒バージョン

池原遼一 男、二十代、沖縄のホテルマン

※この戯曲には白・黒、二種類のバージョンがあり結末と一部登場人物が異なります。
片方だけを上演するも、両バージョンを上演するも「自由に」。

プロローグ

それぞれの時間、それぞれの場所。
撮影者によりビデオカメラがセットされ。
八人の証言者がそれぞれ席に着く。

店長 カメラ、もう回ってるんですか？

撮影者 回ってますよ。

店長 で、何からお話すればいいんですか？

撮影者 高橋瑠美さんは、どんな人でしたか？

店長 いい子でしたよ。ほんとに。

しのぶ 可愛い後輩ですかね。

あかね 可愛いお人形さんみたいな子でしたね。

りょう とても優しい子でした。

林原 特別な存在でした。

諸星 大いなる謎ですね。

月 可愛い女、それ間違いないです。

あの人 とても強い人でした。

店長 最初はちょっと心配やっただんですけどね。

しのぶ この子は逸材だと思いました。

あかね 男やったらみんな好きになるんじゃないですか。

りょう いつも前向きで一生懸命で。

林原 彼女は魔法が使えるんですよ。

諸星 メイドさんとしては完全無欠の存在でした。

月 日本人言う、カワイイ意味わからなかった。

あの人 何度も何度も助けてくれたんです。

店長 なかなかどうして、しっかりした子でしたよ。

しのぶ わかるんです。この業界長いですから。

あかね 性格も良かったと思いますよ。

りよう オムライスが好きでしたね。

林原 彼女の「おかえりなさいませ」は魔法の言葉なんです。

諸星 ちよっとハーフっぽい顔立ちで

月 でもあの女会ってわかりました。

あの人 命の恩人ですね。

店長 勤務態度も良好でしたし。

しのぶ メイドのイロハは私が教えたんです。

あかね 育ちがいいんやなと思ってました。私なんかと違って

りよう よく二人で作って食べました。

林原 僕はここにいていいんだ、そう思わせてくれるんです。

諸星 あんなにメイド服が似合う子は滅多にいないですね。

月 あの女の目みました。空っぽでした。

あの人 たぶん彼女と過ごした時間がハイライトなんです。

店長 お客様からの評判も良かったですから。

しのぶ 教えがいがありましたね。

あかね お客様さんからも人気ありましたし。

りよう 今となつてはよくわかりませんが。

林原 いつもこの時間が永遠に続けばいいのにつて

諸星 彼女の絶対領域は至高でした。

月 私カワイイの意味わかりました。

あの人 私の人生の。

店長 誰からも好かれる子やっと思いますよ。

しのぶ 彼女はとてもいいメイドになりましたから。

あかね ただ、得体の知れないところがあるとは思ってました。

りよう 僕は好きでした。彼女のこと。本当に。

林原 そこまで思わせてくれたのは彼女だけでした。

諸星 メイドさんになるために生まれてきたような子でしたね。

月 中身何もない。怖い思いました。

あの人 ずっともう一度会いたい。そう思ってたんですけど。

1 . 1

店長

面接の時はちょっと驚きましたけどね。家が無いっていうんですから。ルミちゃん、ネットカフェで寝泊まりしてるって言ってました。だから採用するかどうか迷ったんですけど、しのぶさんが「この子は絶対に取った方がいい」って。

しのぶ

私の目に狂いはなかったと思いますけど。仕事を覚えるのも早かったですし、ルミちゃん目当ての旦那様も多かったんですよ。最近よく考えるんです。彼女は何が他の子と違ったのかなって。

林原

何故、ルミちゃんが特別だったのか。僕にもわかりません。もちろん、見た目が可愛いとか、聞き上手、話し上手とかはあるかもしれませんが、でもね、そういった理屈じゃないんですよ。

諸星

ルミちゃん、時々、失敗もするんです。注文を間違えたり、ズッコけたり。だいたい笑って許せる範囲の失敗なんですけど、これはいよいよメイドとして完全無欠の気配が漂ってきませんか？ つまり、ドジっ子属性も完備してるんですよ。萌えたなあ。

あかね

だからこういうittyや何ですけど完璧すぎたんですよ。そこが逆に違和感っていうか。みんなどこか騙されてるんじゃないかって思っていました。根拠はないですよ。女の勘みたいなものです。

りょう

ルームシェアは僕から誘ったんです。前に一緒に住んでた子が彼氏作って出て行ったばかりやったので。荷物は少なかったですね。ほとんどが服とコスメやって言ってきました。一緒に住み始めてからもほとんど増えてなかったと思います。服も新しいのを買ったら古いのはどんどん捨ててましたね。身軽なのが好きて言っていました。

店長

本当は普通のカフェをやりたかったんです。堀江あたりで。それで勉強のためにイタリアンレストランでバイトしてたんですけど、そのオーナーから持ち掛けられたんですよ。メイドカフェの店長をやってみいひんかって。ちょうどブームの頃やったから儲かると思ったんでしょうね。正直、メイドとかオタク文化には興味なかったんですけど、将来のためにいろいろ経験しておくのも悪くないなって思ったんです。自分

のやりたい店の資金を貯めるまでの修行やと割り切ろうと。屋号の『ゆーとぴあ』はオーナーの発案ですね。オタクの理想郷にしたいとかで。正直ダサイなと思ってました。個人的にこだわったのは看板メニューです。生パスタ。

しのぶ いやー、近所で働いてたんですけど『ゆーとぴあ』は、ほんとダメな店だなんて思っていました。萌えの何たるかを理解していない、典型的なブームに乗っかっただけの店だなんて。

店長 最初は全然うまく行きませんでした。当たり前ですよ。メイドカフェのことを何もわかってない僕が店長やっていたんですから。店が変わったのは、しのぶさんが入ってきてくれてからです。

しのぶ いわゆる引き抜きですね。土下座されたんですよ。うちの店で働いてほしいって。悩みましたけど、結局オーケーしちゃったんですよ。ちょうど前の店で変な派閥争いに巻き込まれて居づらくなってたんで。でも、私が働くからには最高のメイドカフェにしてやろうって思いました。

諸星 当時、しのぶさんの移籍はちょっとした事件でしたね。日本橋ではわりと有名な人なんですよ。

しのぶ まず看板メニューをメイドカフェの定番、オムライスにしました。

諸星 メイドカフェにおいてオムライスはメニューでありコミュニケーションなんです。ケチャップで絵や文字を書けますから。

林原 いつも書いてもらってました。ルミちゃんに。林原さんへ♡って。

しのぶ あと、面接にも立ち会うようになりました。店長、見る目ないんで。

あかね メイドになったきっかけですか？ 私は割のいいバイトというか。キャバクラとかでも良かったんですけど、私、アルコール駄目なんです。

りょう 僕は、おもてなし、っていうんですか、接客を学びたかったんですよ。

諸星 確かにメイドさんはかなり高度な接客業だといえますね。2.5次元といいますか、ある種の虚構を演じるわけですから。

店長 ルミちゃんは、何やったかなあ。

しのぶ ルミちゃんは可愛いメイド服を着て働いてみたいって言ってましたね。

あかね ルミも割のいいバイトやって言っていましたよ。

りょう ルミちゃんは僕と似てるなって思ったんですよ。こっちに来るまでは島根の実家の

神社で家の手伝いをしてたって言ってたんで。社会勉強のために大阪に出てきたって。だから、いつかは実家に帰ってお嬢さんを探さないといけないって言っていました。それで似てるなと思ったんです。僕も実家が旅館なんです。和歌山の白浜なんですけど。そういう意味でもルミちゃんはやはりパーフェクトだったといえますね。

1 - 2

店長 ちょうど半年後くらいですかね。お店を再開したのは。いろいろ悩みましたけど、思うところもありましたし。それで元いたメイドの子にも声をかけて。

りょう 僕は素直に嬉しかったですよ。

しのぶ 私はちょっと複雑でしたね。

あかね 私は正直、は？ 何で？ って思いました。

りょう もうあそこで働くことはできませんけど。

店長 ああいうことがあった場所やから、正直不安はありましたけど。戻ってきてくれたメイドの子や、応援してくださるお客様もいますし。

林原 僕は嬉しかったですよ。だって、ルミちゃんのいたお店ですから。

諸星 いやこれはもう誰が何と言おうと断固支持ですよ。僕もSNSで全力を持って応援しよう。

しのぶ 実はもう辞めようと思ってたんですよこの仕事。年も年だし、メイド卒業して、サクッと結婚して子供作って、そういう人生もありかなって思ってたんですけど。

店長 移転も考えましたよ。別の場所で、別の店名でやった方がいいに決まっていますよね。

しのぶ でも何だかね、こういう形で辞めるのは違うんじゃないかって。だって悔しいじゃないですか。

店長 最初の二週間は大変でしたよ。マスコミが家の前で待ち構えてましたから。

あかね ひどかったですね。どこで調べてきたのか家にも来ましたよ。

りょう 僕は実家に帰ってたんですけど、実家にも来ました。

あかね 水ぶっかけて追い返してやりましたけど。

しのぶ 確かに責任ですか、そういうのはあるのかもしれないよ。もしかしたら防ぐことができた事件なのかもしれませんよ。私だって考えますから。あの時あすればよかったんじゃないか、こうすればよかったんじゃないかって。

あかね 私が店長に電話しなければ。

しのぶ 私がしっかり確認していれば。

りよう 僕が鍵を閉めなければ。

林原 僕がお店に来なければ。

店長 僕が店を離れなければ。

諸星 僕がもつと空手を極めていれば。

あかね あんなことにはならなかったんじゃないかって。でもね、そんなこと考えても無駄なんですよ。

1 - 3

店長 お店の雰囲気は、そうですね、だいぶ変わったと思います。内装にはそれなりにお金をかけましたから。イギリス、ビクトリア朝のイメージですね。メイド服も以前はス

カートの短い萌え系のものやっただんですけど、今はロングのビクトリアスタイルですね。落ち着いた雰囲気にしたくて。メニューも一新して、紅茶とケーキ中心ですね。紅茶の茶葉にもこだわっているんですよ。せっかく再開するんやから本物志向で行こうと思ひまして。日本で本物のメイドカフェって何やろうって話ですけど。ただ、貯金を使い果たしてしまったのもう後戻りはできないんです。堀江におしゃれなカフェを出すためにコツコツ貯めてた資金だったんですけど。

あかね アホですよ。私これでも応援してたんですよ。店長の夢とかそういうの。

店長 オムライスですか？ 今はメニューにないんです。イギリス、ビクトリア朝にオムライスはありせんから。

あかね 私は行ってません。知ってますよ。みんな新しいお店に集まっているんですよ。どういう神経をしているんですかね。誘われたりもしますが、絶対に行きません。私、あの子のこと、それほど好きじゃなかったですけど、別に言ってもいいですよ、こういうこと。嘘はつきたくないんです。私は、あの子が好きじゃなかった。むしろ嫌いました。でも、あの場所でお店をリニューアルして再開するって聞いた時は耳を疑いましたよ。あんなことがあったのに、たった半年で。みんな見たんですよ。あそこの裏口で、血だらけで倒れてるあの子を。

2 - 1

月 私帰ります。会社に説明します。あなた本当の目的違った。私の仕事、家事代行。私すること、掃除、洗濯、でもあなたそれ違う。おかしいです。カメラ撮るの目的だったら、卑怯ね。

しのぶ 覚えてますよ。その日は確か午前中に不発弾の撤去があったんです。マンションの工

事現場で発見されたとかで。それで開店が午後からになって、お客様が少なかつたんですよね。

あかね 日本人じゃないのはすぐわかりました。

りょう それで観光客の方かなとも思ったんですけど。

諸星 彼女は中国の大連出身らしいですね。

月 結婚は友達の紹介ね。若くて働き者、いい人いるだから。結婚は本当の結婚。嘘じゃないです。

しのぶ 私も最初は観光客の方かなと思いました。お店がネットで紹介されてるみたいなので。

諸星 僕も一役買ってるんですよ。僕は『日本の誇るオタク文化を海外に発信する会』の副会長なんです。会のウェブサイトは英語、フランス語、中国語に訳されてましてね。

しのぶ だから最近アジア系のお客様も珍しくないんですよ。

あかね ただ、ちょっと雰囲気違うなとも思っていました。

月 ゴミ箱にレシート沢山ありました。デパートのレシート。

しのぶ 頂くことはありますよ。誕生日プレゼントとか。

あかね さりげなく欲しい物、おねだりすることもありますね。

林原 僕もプレゼントしたことがあります。ルミちゃんに。

りょう ルミちゃんももらったのは財布とか、鞆とか、あとぬいぐるみです。これくらいの、かなり大きなクマのぬいぐるみ。

あかね ただ、ぬいぐるみとかは、はっきり言って困るんですよ。もらってどうしろと。

りょう ルミちゃん、困ってるみたいでした。

しのぶ それで、もうプレゼントはやめてほしいって。

月 あの人の財布見ました。写真出てきた。あの女と二人で映ってる写真。たくさん。

りょう チェキはよく撮っていました。二人で。

店長 一枚1500円ですね。

月 カード出てきた。

林原 これが会員証ですね。スタンプカードにもなってるんです。

2 / 2

月 だから私、お店行きました。

しのぶ 女性のお客様もいらつしゃいますよ。その場合は

しのぶ あかね・りょう 「おかえりなさいませ、お嬢様」♡

林原　　ですね！

月　　変な声、変な服の女いる。いかがわしい、お店思いました。

林原　　僕もその日、店にいたんですよ。よく覚えてます。

りょう　ご案内してすぐ、「ルミいるか」と聞かれたので、ルミちゃんを呼びました。

あかね　それでおかしいと思ったんです。だって初めてっほいのにルミのこと知ってるなんて変でしょ。

林原　　ルミちゃんは僕とお話してたんですけど呼ばれて行ったんです。

りょう　ルミちゃんが来たので交代しました。

あかね　その後、しばらくして、あれが起きたんです。

しのぶ　大きな声が聞こえて、たぶん中国語だったと思います。

りょう　ルミちゃんがビショビショになってました。

しのぶ　女の人が空になったグラスを持っていたので、あ！水をかけられたと気づきました。

月、中国語で罵る。

あかね　ルミはポカンとしてましたね。

店長　僕はその場にいなかったんです。不発弾の撤去を見物がてら買い出しに出たので。

林原　　何があったにせよ、水をかけるなんて酷いと思いました。

2・3

店長　店に戻った時、もうその女性は帰った後でした。

りょう　事情をきいて驚きました。そこで初めて、あの男の奥さんだっってわかったんです。

店長　これは何か手を打たないと思いましたがね。

しのぶ　はじめてのパターンでしたから、奥さんが乗り込んでくるなんて。

店長　あの男ですか。ええ、常連と言っってよかったですよ。

林原　　お店で一緒になったことはありません。何度も。たぶん、僕と同じでルミちゃんがいる日を狙って来てたからだと思います。

しのぶ　大人しいというか、口数は少ない印象ですね。

りょう　僕はほとんど喋ったことなかったです。

しのぶ　でも、ルミちゃんとはいつも話が弾んでるみたいでした。

あかね　いるんですよ、そういう客。

林原 僕も話をしたことはありませんね。というか、こういうお店って客同士はあまり話さないんです。だって「おかえりなさいませ旦那様」なんですから、旦那様がたくさんいたら変でしょ。

りよう あの男はいつもオムライスを注文していました。

あかね いつもルミにケチャップで愛愛傘書かせてましたね。ルミ、サルタヒコって。

しのぶ だから、私たちはサルタさんと呼んでました。会員証の名前のところにもサルタヒコって書いていたので。

あかね まあ痛い奴やなと思ってましたね。

しのぶ ニックネームか何かだと思ってました。

あかね ただ、見た目はオタクというよりは、どっちかっていうとヤンキー寄りでしたね。茶髪で日焼けしてましたし。

しのぶ 報道でもありましたけど、ワンピースが好きだったと思いますよ。フィギュアを集めてるって言ってましたから。オタクかどうかまではわかりませんけど。

林原 こういう質問は僕より諸星さんに聞いた方がいいと思います。なんといつても『日本の誇るオタク文化を海外に発信する会』の副会長ですから。

諸星 あの男がオタクかどうかですか？

林原 ただあの人、話し出すと長いので気を付けてください。

2 / 4

諸星 それは難しい問題ですね。オタクの定義について考えないといけませんから。僕ですか？ 僕はオタクですよ。生粋のね。そもそも、オタクという言葉の起源は諸説あるんですが、1983年に中森明夫という評論家が『漫画ブリッコ』の連載コラムで「中学生ぐらいのガキがコミケとかアニメ大会とかで友達に「おたく」さあなんて呼びかけてるのキモイと思わない？」「この頃やたら目につく世紀末的なウジャウジャネクラマニア少年たちを『おたく』と名付ける」と書いた、というのが有力な説ですね。あとは1988年に起きた宮崎勤の連続幼女誘拐殺人事件、これが大きかったですね。この事件の報道の中でオタクという言葉と存在がクローズアップされ世に広まったと。残念ながら非常にネガティブなイメージとしてね。今の若い子はしらないだろうけど、そういう歴史があるんですよ、オタクという言葉には。要するに日陰者だったわけです。日の当たるところに出てきちゃいけない存在。僕の中学校の時のあだ名、ダンゴムシですよ。その頃からオタクでしたから。それが今や、クール

ジャパンに日本橋ストリートフェスタでしょ。いい時代になりましたよ。そりや今でも偏見は根強くありますよ。今回の事件だって、あの男がオタクだったから犯罪を犯したんだって論調の報道ありましたよね。あの男の車にあったワンピースのフィギュアを映しながら「容疑者の車にはアニメのフィギュアが」なんてテロップが鬼の首を取ったかのように入るんですけど、あんなものは僕からすればちゃんちゃら可笑しいですよ。ワンピースなんかみんな読んでますからね。あんなのは『サザエさん』みたいなものですよ。もしくは『コボちゃん』『コボちゃん』読んでたらオタクですか？ 違うでしょそれは。犯人をアニメオタクって決めつけるなら、今だったらそうだなあ『ラブライブ』か『ガルパン』のフィギュアくらい飾ってないとエビデンスとしては弱い！ 僕は『ラブライブ』好きですよ。ニコちゃん押しです。にっこにっこに。それはさておき、あの男がオタクかどうかですが、これは図らずも答えが出てしまいましたね。確かに、あの男はメイドカフェに通ってましたよ、でもそれだけで僕はオタクとして認めることはできませんね。そもそも最近、ゆるいオタクが増えていると思うんですよ。やっぱり1996年に『クイックジャパン』に『エヴァ』が特集されたあたりからですかね、雰囲気が変わったのは。あえて、アニメのグッズ、を持つのがオシャレ。みたいな風潮が生まれたんですよ。ファッションとしてのオタク要素とでもいうのかなあ。今やユニクロにも売ってるでしょ、アニメのTシャツとか。僕は絶対に買いませんけどね。オタクって、もっと濃い何かドロドロしたものを抱ええる存在だと思うんですよ。内面的に。そう、お金を出して買う属性じゃないんですよ。精神性というか生き方、そう、オタクは精神の貴族なんですよ。確かに矛盾はありますよ。僕は『オタクに対する偏見を無くす会』の副会長でもありますから。でもね、偏見を無くすためには、表面的にはなくてですね、本質的なところでオタクという存在を理解してもらわないと、またいつぞやのように、何がきっかけでバッシングされてダンゴムシに逆戻りするかわかりませんから。

2 - 5

店長 これくらいですね。僕らがあの男について知っていたのは、後はほとんど報道で知りました。借金があつて偽装結婚の疑いがあるとか。

りよう 三重県出身で実家の水産会社が倒産したとか。

諸星 ナマコの密漁で前科があつて無職だったとか。

林原 ルミちゃんと「籍になるために神主になる勉強をしたとか。

しのぶ 本名は猿田守、キックボクシングのジムに通ってたとか。

あかね 実は一度だけ、見せられたことがあるんです。日本橋にはいつも買い物に来てるとか、そういう話になって。それで、テーブルの上に。

諸星 凶器は刃渡り12センチ、チタン製のダイバーナイフですね。この近くにお店があるんです。日本橋はオタクの町でもあり職人の町でもありますから。

あかね 怖かったのですぐにしまってもらいましたけど。

諸星 確かにあの男はダイバーナイフのコレクターだったらいいですね。ただ、コレクターとオタクは違いますから。ここは大事なところですよ。今どきのオタクは物ではなく記号に萌える存在なんです。僕はそう定義しますね。

2 / 6

月 あの人の、道具大事にする人。海で仕事する時、大事なのは道具。命かかってるだから。一度、怖い目にあった。海の中で綱に絡んで、その時ナイフ持ってたから助かった。

あの人、仕事話してる時、とても楽しそうでした。いつかまた海潜りたい、言っていました。だから神主になりたい言い出した時、とても驚きました。

店長 あの男はルミちゃんに推薦状を書いてほしいって頼んでたそうです。何でも資格をとるためには神社の推薦状がいるらしいんですよ。

月 あの人、他の日本人とは違う。中身ある本当のことある人。日本の歴史、伝統とても大切にしている人。だから私、勉強しました。日本語、日本のこと。でもあの人、ルミ選びました。とても悲しかったです。

店長 次の日でした。あの男が店に来たので僕が話をしたんです。もうお店に来ないで頂きますかって。

しのぶ 私たちはバックヤードに待機してました。いつでも警察が呼べるように。

店長 以前にもちよっと問題のあるお客様がいて、

しのぶ その時は大変でしたから。怒鳴り散らすは暴れるわで。

あかね 私のストーカーの時ですね。

店長 でも、あの男は驚くほど静かに僕の話を書いていた。出入り禁止の件も納得したみたいで、妻が迷惑をかけて申し訳なかった。ルミちゃんにも謝っておいてほしい」
そう言っって大人しく帰りました。

月 その夜、あの人、泣いてました。

りょう ルミちゃんにLINEがあったみたいなんです。プレゼントを返してほしい。取りに

行きたいから住所を教えてほしいって。

月 あの人、自分は、サルタヒユなのにつて。

店長 それで念のため、しばらくルミちゃんを車で送迎することにしました。

りょう こっちの住所は教えられませんかから、男の住所をきいて、二人で近くのスーパーに段ボールを貰いに行きました。

あかね 何でしょう。嫉妬はあったと思いますよ。だって私と店長が付き合い始めたのもストーカー対策の送迎がきっかけでしたから。

りょう 送り返したのは鞆と財布と靴、全部未使用でした。でも忘れてたんです。店の更衣室に置きっぱなしにしていたクマのぬいぐるみのこと。

3 - 1

しのぶ 事件のあったあの日、本当はルミちゃん、出勤する予定はなかったんです。でも、私に急用ができて。母が入院したんです。それで早番のシフトを代わってもらったんです。

りょう だから、ルミちゃんが来たときは驚きました。店長には連絡いってみたいですけど。

店長 これは困ったことになったなあと思いましたね。

あかね 私は何で今日お前が来んねんと思いました。

店長 あかねとご飯を食べに行く約束をしたので。

あかね ルミが来たら送迎しないといけないわけですよ。

店長 でも仕事ですから、わかってくれと思いましたね。

りょう 店長とあかねさんがピリピリしてるのは感じてました。

しのぶ 母は幸い大したことなくて、遅番のシフトには間に合ったんです。

諸星 あの日には午前中に重要なミーティングがあったんです。ジャパンエキスポってご存知ですか？ 毎年、フランスで開かれている日本文化の祭典なんですけど、それにメイドカフェのメイドを一人派遣したいんだけど、誰かいい子いないかって話になったんですよね。それで僕が推薦するなら『ゆーとぴあ』のルミちゃんしかいないって話になって。

林原 あの日には会社を早退したんです。勤務中に気分が悪くなって。初めてでしたね、早退なんてしたの。会社で転職を勧められて。目の前が真っ暗になって、気が付いたら日本橋に向かってたんです。

月 あの日、仕事終わって帰ったら、あの人いませんでした。家あの人いない、寂しいけ

どいつものこと。でも机の上封筒あった。手紙、離婚届。ハンコ、押してある。私、お店行きました。

林原 『ゆーとぴあ』の前について、ルミちゃんが今日はお休みだっというのは知ってたので、入るつもりはなかったんですけど、覗いてみたら、なんと、ルミちゃんがいたんです。

店長 しのぶさんが遅番に間に合ったので、ルミちゃんはもう上りの時間だったんですけど、林原さんが来たんですよ。これまた困ったことになったなあって思ったんですけど、ルミちゃんが「林原さん来たので、私もう少しいいですか？」って自分から。それで結局、閉店までいることになったんです。

林原 今日こそルミちゃんに全部話そう、そう思いました。僕、ルミちゃんに一部上場企業で企画部の部長をやっているって話してたんですけど、本当は違うんです。もっと地味な会社で大したことのない仕事をしてる平社員なんです。最初についた嘘がどんどん大きくなって。でもほんと、自己暗示っていうんですか？ 店にいる間は自分が一部上場企業の部長になったような気がして。後でもすごい自己嫌悪に陥るのはわかってたんですけど、どうしても言い出せなくて。でも、その仕事もどうなるかわからないってことになって、そんな日に、ルミちゃんに会えて、これは運命なんじゃないかなって、思いました。洗いざらい、本当のことをルミちゃんに話したんです。嘘ついてごめんなさいって、謝ったんです。

りょう 突然、林原さんが泣きだしたので驚きました。
あかね 何事かと思いましたがね。

林原 そしたらルミちゃん、僕の手を握って言うてくれたんです。「旦那様、誰だっっていうことありますよ。誰だっって嘘の一つくらいつきますよ。だから大丈夫」って。あの時はホント、救われた気がしたなあ。

諸星 正直、あれは感動的な光景でしたね。僕も貰い泣きました。
林原 オーダーストップの確認が入って、気が付いたんです。もう七時半を回っていました。ずいぶん話し込んだなああって。

諸星 時間も時間だし僕の大事な話は後日にしようと思いました。
店長 僕は締め作業を指示して、駐車場に車を取りに行きました。ルミちゃんを家まで送らないといけなかったの。

あかね 私は表の看板を片付けてくると言っ、外に出ました。それで店長に電話をかけたんです。

店長 駐車場に着いて、車のエンジンをかけたところで電話が鳴りました。あかねからでした。

あかね ちょっとルミのこと甘やかしすぎちゃうって。他にもいろいろ、余計なことも言ったと思います。

店長 それで僕は言ったんです。別れようって。

あかね 目の前が真っ白になりました。その時に隣を誰かが通ったような気が、今から考えればします。ニュースで防犯カメラの映像流れてましたよね。あそこに映ってるメイド私なんです。

店長 やっぱ僕の立場でメイドと付き合うのは無理があるなって。一度失敗してわかってるつもりやっただんですけど。

3 - 3

月 店の前、女立ってました。様子おかしかった。何かあったと思いました。

あかね 誰かに話しかけられて我に返ったんです。びっくりしましたよ。あのルミに水をかけた中国人やっただんですから。

月 「うちの人、来てるか？」

あかね 「来てませんよ」それでも彼女が店の方に向かおうとしたので慌てて止めたんです。「もう閉店ですから」

月 「ルミ、来てるか？」

あかね 「来てません」鬼気迫るっていうか、ヤバい雰囲気やつて、店に向かおうとするから、私は女の前に立ちただかかってブロックしたんです。今から考えるとルミのために何であそこまで体を張ってしまったんやろうって。

月 女、邪魔しました。私思いました。あの人も、ルミも店いる。

あかね それでちょっとした押し問答になったんです。

3 - 4

林原 会計を済ませると、ルミちゃんが 行つてらしゃいませ、旦那様」ってお見送りしてくれたんです。いつものことなんですけど、あの日のお見送りの笑顔は特別に素敵だったような気がします。たぶん一生忘れないと思います。

諸星 僕も林原さんの後に会計を済ませました。お見送りは、りょうちゃんがしてくれまし

た。

林原 何て言ったらいいんですかね。本当に幸せな気持ちで、細い路地を左に曲がって、通りに向かって歩きたそうとした、その時でした。気配がしたんです。今だから言うわけじゃないですけど、ほんと何か禍々しい気配がしたんです。

諸星 店の外に出ると林原さんが突っ立ってたんです。じっと何かを見てるんです。僕の場所からは死角になってたんですけど、林原さんの視線の先にあるのは裏口に通じる細い路地のはずでした。

しのぶ 最後のお客様、林原さんと諸星さんが帰って、私はレジの締めをやっていました。りよう 僕は洗い物をしていました。

諸星 林原さんの隣まで行くと、何を見ていたのかわかりました。

林原 暗がりに、あの男がいたんです。

諸星 僕は店長から事情を聞いていたので言ってやったんです。「あんた何でここにいるんだ。出入り禁止のはずでしょ。ましてやこんな時間に。そもそも出待ちは禁止されているの知ってるでしょ」

林原 「お前には関係ない」あの男はそう言いました。

諸星 それでフツフツと怒りが込み上げてきました。お前のような最低限のルールも守れないような奴がいるからオタクは白い目で見られるんだって。僕は『オタクに対する偏見を無くす会』の副会長としての責務を果たそうと決意しました。「口で言うてもわからないようだな」

林原 そう言うと諸星さんは背負っていたリュックを下したんです。ズシリとすごい音がしました。

諸星 たぶん三十キロはあるでしょうね。普段からいろいろ持ち歩いていますから。

林原 脅威を感じたんでしょうか、その音に反応するようにあの男は構えました、こんな風に。後で報道で知りましたがどキックボクシングのジムに通ってたんですよね。

諸星 僕も空手の道場に通ってたんですよ。

林原 諸星さんも構えました。

諸星 小学校の頃に。3か月。

林原 秒殺でした。左が軽く入って、右がこう。音がしました。グジャって。

諸星 そりゃ痛かったですよ。鼻の骨が折れたんですから。

林原 ゆっくりと、前のめりに倒れていきました。

諸星 薄れゆく意識の中で、あの男が林原さんに向う尋ねるのが聞こえました。

林原 「ルミちゃんはいるか？」 って。それで思わず声が出たんです。自分を奮い立たせるために。

あかね 店の方から変な叫び声が聞こえてきたんです。

林原 キエー。

しのぶ 店の外から叫び声が出たんです。

林原 キエー。

しのぶ 何事かと思いましたね。

月 悪魔的、鳥の声、何か悪いこと起こった思いました。

りょう ちようど洗い物を終わった頃やと思うんですけど、僕には聞こえませんでした。

しのぶ それで店の外に出たんです。

あかね 慌てて店の方に戻りました。

林原 この暴力男からルミちゃんを守らないといけない。無我夢中でした。

しのぶ 林原さんがくるぐる腕を振り回して、

林原 顔から男にぶつかりました。

しのぶ あの男は膝蹴りっていうんですか、

林原 砂をかんだ時のような音がしました。下の前歯が欠ける音だったんですけど。もうそこから先はしばらく記憶がないんです。

あかね 林原さんは口から、諸星さんは鼻から血を流して倒れてるし、これはヤバイ、かなりヤバイ、そう思いましたね。

しのぶ あかねちゃんが見えたので、店の中に入るように言いました。

あかね 店の中に駆け込みました。

しのぶ すぐに入口に鍵をかけました。

あかね 店長に電話をかけました。

しのぶ 正面の入り口はガラス張りで不安だったので、シャッターを降ろすボタンを押ししました。

店長 ちようど車で店に向かっていました。何度も信号に引っかかっていつもより時間がかかってたんです。そんな時に、あかねから電話がかかってきたので、てっきりさっきの別れ話の続きかと思ったんです。それですぐには出ませんでした。

あかね 店長はなかなか電話に出ませんでした。何度も何度もかけなおしました。

月 あの人、スマホ、LINEしてました。私、聞きました。「ここで、何してる？」

あの人、答えました。「本当のこと確かめにきた」

しのぶ シャッターはゆつくりとしか閉まらなかったの、ものすごく焦りましたね。

りよう その時、僕は洗い物を済ませて、ルミちゃんと更衣室にいたんです。外で何が起きているのかはわかりませんでした。二人で今日の晩御飯は何にする？って話をしていたと思います。ルミちゃんはオムライスが食べたかったって言ってました。僕は正直まかないで食べ飽きてたんですけど、ルミちゃんが食べたいなら仕方ないな、ていうかルミちゃんほんまオムライス好きやなって思いつながら、しのぶさんに今日余ったチキンライスを分けてもらえないか聞きに行っただけです。更衣室を出る直前、ルミちゃんのスマホが鳴ったのを覚えています。

しのぶ りようちゃんが来たので、ルミちゃんは今どこにいるか聞きました。

りよう しのぶさんの剣幕に驚きながら、更衣室にいと答えました。

しのぶ それを聞いてほっとしました。

りよう その時初めて何か大変なことが起こってるんやと気づきました。

しのぶ りようちゃんに手短かに事情を説明しました。

月 あの人、言いました。「何故こゝ来た」私答えました。「あなたのこと、心配だから」

私言いました。「私たちの結婚、最初、嘘の結婚、でも今、私、あなたのこと、本当に好きになってしまいました」あの人、何も答えない。その代り、上、見た。夜の空。いつの間にか、雨、降った。私言いました。「私、あなたと帰りたい」あの人、少し考えて「わかった」私、嬉しかった。

店長 別れるっていう気持ちは変わってませんでしたが、さっきはちょっと売り言葉に買い言葉というか、

月 私、あの人腕とった、二人で帰る思いました。

店長 話が急やったので申し訳なかったなど。

月 その時、暗い道の奥から、あの女来ました。大きなクマのぬいぐるみ持って。

店長 努めて冷静に話そうと決意して電話にでました。

あかね 店長がやっと電話に出たんです。

林原 たぶんですけど、あれが夢でなかったとしたら、

月 あの女、ぬいぐるみ返す、言いました。

林原 僕には聞こえてたんです、あの男はルミちゃんにこうききました。

月 本当のこと、知りたい。

林原 ルミちゃんはこう答えたと思います。

月 本当のこと、ない。

林原 私はあなたの思っているような人間じゃないんです。だからもうここには来ないでください。

月 あの人、言いました、嘘つき。

林原 運命だと思ったのに。

月 あの人、鞆中から、出しました。仕事の道具。

諸星 刃渡り12センチ、チタン製のダイバーナイフですね。

店長 事情を聞いて、あかねに伝えました。店の入り口に鍵をかけて僕が戻るまで絶対に開けるなど。そして裏口にも忘れずに鍵をかけるようにと付け加えました。

あかね 店長の指示をしのぶさんに伝えました。

しのぶ それで裏口のカギを忘れしていたことを思い出したんです。

月 私、叫びました。逃げて。あの女、走りました。ぬいぐるみ投げました。

りょう たまたま僕が店の奥、一番裏口に近い場所にいました。しのぶさんに指示されるまでもなく裏口に走りました。

月 あの人、追いかけてきました。私止めたかった。

りょう 僕が裏口のカギをかけました。

月 あの人、ドア、叩いてました。

鉄の扉を激しく叩く音。

りょう 急にドアを外から激しく叩かれて驚きました。僕はあの男が叩いていると思ひ込んでいたので間一髪やったと、むしろほっとしてました。

月 あの人、ルミの背中刺しました。何度も。何度も。

りょう ルミちゃんの悲鳴がドア向こうから聞こえてきたときも、まだ一体何が起こっているのか、僕にはわかりませんでした。

4 - 1

店長 行旅死亡人っていうらしいですね。警察で教えてもらったんです。本人の氏名や本籍

地、住所が判明せず、遺体の引き取り手がいない場合のことをいうらしいんですけど。

しのぶ 何かあるなどは思っていましたよ。面接の時からそう思っていました。でも、一緒に働いている時は全く感じませんでしたね。違和感というかそういうの。

あかね 私はやっぱりって思いました。いろいろな違和感が全部繋がった感じですね。後出しジャンケンみたいで申し訳ないですけど。

諸星 いやー、びっくりしましたよ。狐につままれたような気分でしたね。おいおい、じゃああの子は誰なんだって。

林原 何でしょう。悲しかったですね。

りょう あの頃は、いろんなことが立て続けに起こりすぎて。でもやっぱりショックでした。

店長 いや、それはね、身元に不確かなところはあるとは思ってましたよ。でもまさか名前まで偽名やったなんて。これが履歴書のコピーです。本物は警察に提出しましたから。

しのぶ まさかですよ。それは少しは話したりしますから、子供の頃の話とか、過去の恋愛の話とか、何もかも嘘だったなんて。

あかね こんなこと言っているのかわかりませんが、あの子たぶん整形してますよ。わかるんですよ。私もしようかなあって思ったことありますから。その時にいろいろ調べて詳しくなつたんです。あと、たぶんハーフですね。もしくはクォーター。やから島根の神社が実家やなんて怪しいなと思ってたんです。

諸星 警察が調べても何も出てこないっていうんですから、おかしな話ですよ。普通、身元がわからない場合は歯の治療の記録なんか調べるそうですけど、それもないってことでしょ。でもやっと彼女のことをわかった気がしましたね。これは彼女がメイドとして何故、完全無欠だったのかということにも繋がると思っています。

りょう ルミちゃんの荷物は警察が押収していきました。でも、大した手掛かりにはならなかったんやと思います。お話ししましたよね、ルミちゃん私物はほとんど持ってなかったんです。一度、話したことがあるんです。家賃も折半してるし遠慮しなくていいのにつて。そしたらルミちゃん、晋、大切なものを無くした」ことがあって、それ以来、物を持たない主義になったって。

林原 悲しかったっていうのは、裏切られたとかそういうのじゃないんですよ。何て言ったらいいのかなあ。僕と同じだったんだなって思ったんですよ。ルミちゃんが僕に言うてくれたんですよ。誰だって嘘のひとつくらいつきますよ」って。あれはたぶんルミちゃん自身のことだったんですよ。そう考えたら、僕はとても悲しくなって、泣

けてくるんですよ。だって、僕は辛かったですから、嘘をついて、自分を偽って。

あの日、ルミちゃんに本当のことを話せた時、とても救われた気がしたんです。でも、ルミちゃんは本当のことを誰にも話してなかったわけでしょ。だから悲しいんです。

りよう そういったことを、少しづつ思い出しながらこのノートに書いてみたんです。ルミちゃんが話してくれたこと。とりとめのないことばかりですけど。これを書きながら思いました。「一緒に暮らしたのに、僕、ルミちゃんのこと本当に何にも知らなかったんやなって。」

それでも手掛かりはありました。ルミちゃん、島根の神社が実家やって言っていましたから。それともうひとつ。

あかね いつもルミにケチャップで愛愛傘を書かせてましたね。ルミ、サルタヒコって。

しのぶ ニックネームか何かだと思っていました。

4 - 2

りよう あの男がサルタヒコって名乗ったことには、何か意味があるんじゃないかなって思っ
たんです。ネットで調べて、日本の神話に出てくる神様やということがわかったので、

「島根県」 「神社」 「サルタヒコ」で検索してみました。それで駄目もとで行ってみたんです。何でしょう。やっぱり納得できなかったんですよ。自分なりに決着を着けたかったんやと思います。二件目と三件目の神社は空振りでした。最後の、三件目の神社はものすごい山の中にあって、行くのは少し大変やったんですけど、ネットで見た写真が気になって。ルミちゃんが話してくれた風景と重なるっていうか、それで思い切っ行って見たんです。路線バスを二回乗り継いで、終点のバス停の目の前がその神社でした。

あの人 あの日はたまたま実家に帰ってたんです。いつもは別の場所で暮らしてますから。いろいろ事情がありました。だから驚きましたよ。突然、りようさんが訪ねて来られた時は。

りよう 僕が、ルミちゃんの名前を出すと、あの人顔色が変わったんです。何でしょう、嬉しそうでもあり、悲しそうでもあり。それで直感したんです。ああ、この人もルミちゃんが好きやったんやなって。

あの人 あの時家にいたのが私一人でもよかったです。父や母がいたらあんなにゆっくりお話しできなかったと思います。二人とも出かけてましたから。私の生活にはいろいろな制約

があるんです。やっていいこと、いけないこと。

りよう その神社は二人の神様を祀ってるそうなんです。サルタヒコとアミノウズメ。この二人は夫婦やそうです。

あの人 私どもの神社はアミノウズメの子孫、稗田氏に繋がるとされているんです。アミノウズメは岩戸隠れの時に、胸乳をかき出で、裳ヒモをほとに忍し垂れき、神様ですね。

りよう 立ち話も何ですかということ、家の中に案内されました。綺麗なお庭の見えるお座敷に通されて、そこで話をさせてもらいました。僕が何故この神社に来たのかを。

あの人 りようさんから写真を見せてもらいました。少し雰囲気は変わりましたが、それはそうですよね、かれこれ十年にもなるんですから。でも、すぐにわかりました。やっぱり彼女だって。

りよう 話が終わると、あの人少し間をおいて僕に言ったんです。今度は私が話す番だと思っうけど何かから説明していいかわからないって。

あの人 本当に何かから説明していいかわかりませんでした。それでとりあえず自己紹介からはじめることにしたんです。私が高橋瑠美ですって。

りよう サルタヒコを名乗る変わった男があの人神社に来たことがあるそうです。その時は両親が対応されたとかで、どんなやりとりがあったかはわからないんですけど。

5 - 1

あの人 彼女と出会ったのは先ほどもお話しした通り、十年ほど前です。私が、そして、たぶん彼女も中学生の頃ですね。出会ったのは東京です。その頃、私は東京にいたんです。何と言いますか、お恥ずかしい話なんですけど、家出してたんです。その頃はここには何も無いと思ってましたから。今も実際何もありませんけど。とにかく当時はこんな田舎で一生を終えたくない、その一心でした。こっそりお金を貯めて、夜行バスで。あてなんかなかったですよ。行けば何とかなるだろうって。今から考えるとほんと馬鹿ですよ。

案の定、お金はすぐに無くなりましたし、住む場所も働く場所も見つからなくて。冬だったのですごく寒かったのを覚えてます。でも、寂しくはなかったですね。というのは私と同じような子がたくさんいましたから。その一人が彼女だったんです。私と出会ったときはルナって名乗ってました。二ノ宮瑠奈。私たちはすぐに仲良くなりました。名前が似てたのもありますけど、何ていうかすごく気が合ったんです。しばらくして住み込みで働ける場所も見つかりました。街で出会ったクロムハーツっ

ていう男の人が紹介してくれたんです。いつもクロムハーツのアクセサリーをジャラジャラ付けていたので私たちはそう呼んでました。紹介された仕事は、何というか、あまり条件の良い仕事ではなかったんですけど仕方なかったんです。私とルナちゃんはそこでルームメイトとして暮らしました。半年くらいかな。そこでの生活には正直、ほとんどいい思い出はありません。むしろ嫌な思い出ばかりですね。ただ、ルナちゃんと一緒にいる時は楽しかったです。二人だけでクリスマスパーティーをしたり、お正月にお餅食べたり。あの頃はルナちゃんと一緒に過ごす時間だけが唯一の楽しみだったんだと思います。

5 - 2

撮影者 今日、私は初めてこのカメラの前で話すことを決めました。撮影者が自らカメラの前で話す。こういうのは珍しくもなんともないんですけど、今日まではどうしても、決心がつきませんでした。何でしょう。ここに来てようやく私も語り手の資格を得たのではないかと思うんです。

あの人 生活はいつもギリギリでした。いくら働いてもクロムハーツが何割か、というかほとんど持って行ってしまうので。今から考えるとほんと馬鹿ですよ。そして、ギリギリというのは要するに、いつ何がきっかけで奈落のどん底に落ちるか、わからないということなんです。

撮影者 私はこれを風変わりなドキュメンタリーとして作っているつもりなんですけど、自分のための記録でもあるんです。やっぱり私も彼女について話したかったんですよ。

あの人 私が何というか、病気になってしまったんです。病院に行けば簡単な手術で治る病気だったんですけど、もちろん保険証なんてありませんし、お金もありません。でも病院に行かないとお腹が痛くて仕事どころではないので、いろんな人から借りたお金で薬を買って、それを飲みながら働いてたんですけど、すぐに限界がきて、寝込んでしまったんです。そんな私をルナちゃんは一生懸命看病してくれました。手術を受けられるように、まとまったお金を工面してくれるように、クロムハーツにかけあってくれました。そこで私たちはある仕事を紹介されたんです。

撮影者

というのは、本物の高橋瑠美の話をきいてやっとな確証を得ましたから。テレビのニュースで見たメイド姿の彼女に、やはり私は会ったことがあるという確証を。

5 - 3

あの人

それは私たちが頑なに断り続けてきたタイプの仕事でした。私たちは馬鹿でしたけど、それくらいはわかっていたんです。そんなことをすれば本当にとりかえしのつかないことになるって。でも背に腹は代えられなかったんですよ。

撮影者

以前、私は愛知県にある、とある小さな映像の制作会社に勤めてました。そこにですね、何と言いますか、ちょっと変わった先輩がいたんです。いい人なんですけど、面倒見が良くて、私も会社に入ったばかりの時はいろいろお世話になりました。ただ、その先輩にはちょっと問題がありました。秘かな趣味というか。

あの人

クロムハーツの話ではこの仕事は二人一組とのことでした。でも、その時わたしは寝込んでいたので、仕事なんかできるはずなかったんです。ルナちゃんは私の分も働くので一人でもう一人にかならないかとクロムハーツに頼み込んでくれたんですけど、答えはノーでした。先方の要望でどうしても二人で行ってくれとのことでした。

撮影者

私が何故、その先輩の秘かな趣味を知っているのかというと、手伝ったことがあるんです。一度だけ。その、何と言いますか撮影を。今から十年ほど前ですね、いつもは会社とは関係のない人間を助手として雇ってたらしいですけど、その日はどうしても都合がつかなかったみたいで、私のところに電話がかかってきたんです。五万出すからちょっとバイトしないかって。待ち合わせの駅に着いて、先輩の車に乗り込むと、そこで初めて仕事の詳しい内容を聞かされました。

あの人

新幹線の切符はクロムハーツが用意していました。私はルナちゃんに支えられながらどうにか新幹線に乗り込み、二人で名古屋に向かいました。その間の記憶は断片的です。意識が朦朧としてたので。ただ、ルナちゃんが私の手を握って励ましてくれたのは今でも覚えています。

撮影者

少し迷いましたが、引き受けることにしました。言い訳かもしれませんが、何よ

り好奇心があったんだと思います。その頃から私は作家になりたかったとか、いつか自分の作品を作りたいという目標がありましたから。こういうヤバい橋を渡っておくのもいい経験になるのではと思っただけです。

あの人 気が付くと私はいつの間にか新幹線を降りて車の後部座席に座っていました。

撮影者 まず驚いたのは二人とも明らかに未成年だったことですね。これはいくら何でもヤバいんじゃないかとは思いましたが、先輩は気にする様子もありません。片方の少女は体調が悪いのか、ぐったりしていました。先輩は最初、病人が来たことに立腹したようで、クロムハーツがどうか、3Pがどうか毒づいていましたが、元気な方の少女が自分が二人分頑張るなどと健気にも訴えたので、すぐに気を取り直したようでした。おそらく好みのタイプだったんだと思います。私たちは二人の少女を乗せ、郊外へ車を走らせました。

あの人 印象的な甲高い声の男が興奮気味に話してたのを覚えています。最初は山奥の廃墟か何かで撮影をして、その後、ホテルに移動するとか。

撮影者 廃墟は工場の跡地か何かでしたね。錆びた鉄の扉を私が押し開けて、枯草の生い茂った駐車場に車を入れました。先輩はいそいそと二着のセーラー服を取り出し、二人の少女に着替えるように指示しました。

あの人 ルナちゃんがセーラー服に着替えているのが見えました。ははあ、そういう趣味の客かあ、と思いましたが私は体を動かすことができませんでした。それどころか車に酔ったみたいで吐いてしまいました。甲高い声の男の舌打ちが聞こえました。

撮影者 元気な方の少女が、病院に連れて行くように訴えましたが、先輩は、撮影が終わったら連れて行ってやるからとか何とか言いながら、カメラ片手に元気な方の少女を引きずるように、廃屋に入って行きました。

あの人 ルナちゃんと甲高い声の男が車から降りてどこかへ行ったのがわかりました。

撮影者 私はゲロの処理を指示され車に残されました。ティッシュで車のシートを拭いている間も、ぐったりした少女は「ルナちゃんルナちゃん」とうわ言を呟いてました。ためしに胸を揉んでみましたが何の反応もありませんでした。

あの人 男が胸を揉んできましたが無視しました。

撮影者 おでこに手を当てるとかなりの熱があることがわかりました。私は目の前のゲロまみれの少女がどうにも哀れに思えてきて、というかこの子はこのままだと死ぬんじゃない

いかと不安に駆られました。

あの人 車に残っていた男の気配が無くなったのがわかりました。どこに行ったのかはわかりませんが、私はこのまま見知らぬ場所で一人ぼっちで死んでいくのかと思いました。

撮影者 先輩をどう説得しようか考えながら廃屋へ向かいました。既に私は非常に後悔していました。

あの人 心残りにはルナちゃんでした。私が病気になったばかりに、今頃、酷い目にあってるんじゃないかと思うと涙が出てきました。

撮影者 しかし本当に心底、後悔する出来事がこの後、待ち受けているとは夢にも思いませんでした。というのは廃屋から先輩の断末魔のような悲鳴が聞こえてきたのです。

あの人 私は最後の力を振り絞り、車外の様子を見ようと起き上がりました。

撮影者 廃屋に駆け込むと、裸の先輩が股間を押えて、泡を吹いて倒れていました。

あの人 裸のルナちゃんがカメラを担いで走って来るのが見えました。

撮影者 慌てて外に戻ると、元気な方の少女が裸で運転席に座り、今にも車を発車させようとしているところでした。

あの人 ルナちゃんに車の免許を持っているかどうか尋ねましたが、持ってるわけないのとことでした。

撮影者 車に駆け寄り半分だけ空いていた運転席の窓から手を突っ込んで、少女の腕をつかみ何とか阻止しようと試みました。

あの人 それと同時にエンジンがかかり、

撮影者 裸の少女が思い切りアクセルを踏み、

あの人 男が慌てて窓枠にしがみつくと、

撮影者 狂ったようにタイヤが空転して、

あの人 車が急発進しました。

撮影者 目の前に半開きになった工場の鉄の門扉が見えました。

あの人 すごい音が出て、血しぶきがルナちゃんを真っ赤に染めました。

撮影者 そこからの記憶はありません。

5 / 4

あの人 …覚えてますよ、私、あなたのこと。

撮影者 そうですか。

あの人 私の胸、揉んだでしょ。

撮影者 すみません。

あの人 生きてたんですね。

撮影者 え？

あの人 死んだのかと思いましたよ。だってほんとすごい音がしましたから。

撮影者 病院で半年くらい寝たきりでした。

あの人 もう一人は？

撮影者 さあ、先輩とはもうあれから会ってないんです。

あの人 そうですか。

撮影者 あの後、どうなったんですか？

あの人 気が付いたら病院でした。ルナちゃんは車にあつたお金を置いてどこかに行ってしまった。

いました。それっきりです。

撮影者 そうですか。これが何かわかりますか？

あの人 それは、

撮影者 あの時に引きちぎったみたいなんです。これをいつかあの子に返したかったんですけど。

あの人 それはルナちゃんが大切にしていたお守りですね。

撮影者 ルミさん、もしよかったこれ、

白バージョン

五代

これはタカラガイっていうんです。お守りみたいなものですね。この形がね、女性をイメージさせるとかで。彼女、昔同じものを持ってたけど無くしたって言ってましたから。あげるって言ったんですけど受け取ってもらえなくて。今更ですけど。

黒バージョン

池原

これはタカラガイですね。お守りみたいなもんです。この形がですね、女性をイメージさせるとかで。本島の方にはないんですか？ そうなんです。このあたりの海で獲れるわけさ。あ、お土産物屋さんでも売ってますよ。でーじ高いもんじゃありません。

あの人 それはあなたが持っていた方がいいと思います。それとルナちゃんが沖縄出身というのはいい線いっていると思いますよ。初めて会った時、微かに訛りがありましたから。今から考えたら確かに、あれは沖縄の訛りだったかもしれないですね。

ハロウィンパーティーの賑やかな音が聞こえてくる。

しのぶ お久しぶりです。えーっと、じゃあ、一応やらせて頂きますね。おかえりなさいませ、

旦那様。本日は、萌え萌えハロウィンナイトとなっております。

林原 この格好ですか？ いや、お恥ずかしい。でも今日はコスプレして来るとチエキが一枚半額なんですよ。

しのぶ 本日のおすすめメニューはハロウィンスペシャルパンキンオムライスです。

諸星 しかし何なんですかね。このハロウィンってやつは。コスプレってオタクの特権のはずですよ。

店長 いやね、やっぱりメイドカフェにはオムライスは必要かなと思ひまして。

諸星 結局、一般人もみんなしたかったわけですよ。コスプレを。変身願望とでもいうのかなあ。

林原 え？ これですか？ わかりませんか？ C3POですよ。

諸星 で、僕がダースベイダー。これには一応コンセプトがありましてね、コスプレの起源はSFなんです。アメリカのSFオタクがはじめたものなんです。だからそれに敬意を表しようと思ひましてね。

店長 え？ 沖縄まで行ってたんですか？ 何でまた？

諸星 で、結局、何かわかったんですか？

店長 いや、ちょっと待ってください。いや、実はですね、次にお会いしたらお話しようと思ひてたんですけど、

しのぶ 何ていうか、もう止めにしませんか？ 彼女のこと詮索するの。

店長 あれから僕もいろいろ考えたんです。彼女は僕らの知ってる限りの彼女だった。それでいいんじゃないかって。

林原 そりゃ僕も最初は知りたかったですよ。彼女の本当のこと。だから協力しようと思ひました。でもね、嫌な言い方ですけど夢を壊してほしくないんです。

諸星 そうそう、あなたの撮影につきあって気が付いたことがあるんです。全体性を欲望する精神の貴族としてのオタクは、たぶんもうとつくに滅んでいたんですよ。空虚な記号と戯れていれば十分なんです。彼らも、そして僕も。

林原 これ以上は、あの男と同じになってしまふんじゃないかって思うんですよね。

諸星 つまり彼女は完璧な記号だった。僕はそれでいいと思います。そもそもこの国に本物の何かなんてあるのかな。

6 - 2

あの人 私、看病してもらってた時、きいたことがあるんです。「ルナちゃんは何故そんなに強いのか？」って。すぐには答えてくれませんでしたけど。しばらくして私が眠ったと思っただけでしょうね。ルナちゃん、「私は一度死んでいる。帰る場所もない。だから何があっても平気なんだ」って。

店長 一度みんなで行ったことあるんですよ。白浜にある、りょうちゃんの実家の旅館。二泊三日でカレンダーの撮影に。十五周年の記念グッズを作ろうって話になって。

あかね 立派な旅館でしたよ。結局、りょうも恵まれてるんですよね。

店長 いわゆるグラビア撮影ですね。

しのぶ というのは口実で社員旅行みたいなものでしたけど。

あかね 楽しかったですよ。

しのぶ 海で遊んで、観光して、夜は宴会でしたね。

あかね 全部店長の奢りでしたから。

店長 もちろん撮影もちゃんとしましたよ。カレンダーもそこそこ売れましたし。

林原 僕買いましたよ。

諸星 僕も買いました。

林原 でもルミちゃんの水着姿がなかったんです。

諸星 僕は憤りを覚えましたね。

しのぶ そういえば、ルミちゃんだけ水着にならなかったんですよ。火傷の跡があるとかで。

あかね お風呂で見ましたけど確かにありましたね。肩に。大した大きさじゃなかったですけど。

店長 まあ女の子はそういうの気にしますから。

りょう みんなで海水浴した時もルミちゃんだけ水着にならなかったんですよ。パラソルの

下でみんなが遊んでるのをずっと見てました。

店長 仕方ないからその写真をカレンダーに載せたんですよ。

林原 でも、白い砂浜の大きなパラソルの下で海を眺めてるルミちゃんも素敵でした。絵になるってどうか。

りょう 何ていうか、楽しそうでしたね。ルミちゃん。

しのぶ 楽しかったなあ。

あかね 全部店長の奢りでしたからね。

店長 ルミちゃんを採用してよかったとは、今は言いにくいですね。あんなことになってし

まったので。ただ、一生懸命働いてくれてましたし、彼女もお店のことを好いてくれてたと思うので、それは否定したくないです。

白浜に遊びに行ったとき、あの子に言われたんですよ、「私、今人生で一番幸せなんです」って。初めて居場所ができたって」って。お世辞半分としても、やっぱり嬉しかったですね。

五代 彼女はここで亡くなったんですか。そうですか。

知らなかったんです、半年くらい海外にいましたから。ベトナムに。あとカンボジアにも。まあ、旅行ですね。写真が趣味なんで。タイにも行きました。それで帰って来て、偶然、ネットの記事を見つけたんです。写真見てびっくりしました。

彼女と出会ったのは一年くらい前です。だから事件の少し前くらいかな。その頃、露天商をやっていたんですよ。ミナミで。ハンドメイドのアクセサリーとかそういうの売っていたんです。

彼女はまあ最初はお客さんですかね。といっても何も買ってくれませんでしたけど。タカラガイのアクセサリーに興味があったみたいで。いろいろ話をしました。だからこれプレゼントしたくて、ほんとに今更ですけど。

東南アジアから中国、沖縄にかけての古い文化らしいんですよ。日本の縄文時代の遺跡からも出てるんですよ。つまり日本人の祖先は海の道を島伝いにやってきました。そうです、柳田国男、よくご存じですね。

まあそんな話をいろいろしましたね。それで親しくなったんです。付き合ってたとかそういうんじゃないですよ。何度かうちに泊りに来たことありましたけど。

飲食店で働いてるってきいてました。でもまさかメイドカフェやったなんて僕には、りょうって名乗ってたんです、彼女。実家は和歌山の旅館で社会勉強のために大阪に出てきたって。だからいつかは地元に戻ってお嬢さんを探さないといけないって言うてました。

きましたよ。全部でたらめやったんですよね。何なんすかね。約束してたんですよ、いつか一緒に旅行行こうって。遠くに行きたいって言うてましたから。

僕はそのつもりやったんですけどね。

池原 その写真では何とも言えませんね。今は駐車場になつてますけど、ここにあったはずよ。店の名前は確か『三ライカナイ』内地でいうところの理想郷とか、あの世とかそういう意味ですかね。一階建てで、二階がバーというか飲み屋、一階が住居。家族三人、そこで暮らしてたわけさ。

家族仲は良かったはずよ。オットーは陽気な人で、僕も子供の頃はよく一緒に遊んでもらいましたね。オッカーはそうですね、デージーちゅらかーぎーでしたね。お店に来るのは基地の人が多かったはずよ。地元民はあんまりいかなかったと思えますね。

彼女は、そうですね、マイフナーで自立たん子だったはずよ。クラスでは、でもたぶんあえてそうしてたんだと思います。複雑だったわけさ。彼女の立場は、オットーはアメリカ人の元軍属で、オッカーは宮古の出身ですから。いろいろあるわけですよ。

学校に行かんくなったのは中学に入ってからだはず。オッカーが病気になって、代わりにお店を手伝ってたみたいさ。それでちやー宿題を届けに行ったことがありましたね。一審近所に住んでる同級生が僕だからさ。

それで何でそういう話になったのかはわかりませんが、一度、二人で美ら海水族館に行ったことがあるわけさ。デートとかそういうんじゃないですよ。行ったことがないって言ってたからさ、それなら行ってみる？ ってそれだけさ。

そういえばその時にお土産物屋さんで買ったような気もしますね。タカラガイのお守り、そんな立派なのじゃなくてデージー小さいやつですけどね。

あ、思い出した。どこか遠くに行きたいって言ってたんですよ。それでなんでか美ら海水族館に行くことになって。全然遠くじゃないですよ。全く。

それからしばらくしてからですね。火事になったのは

一階の店から出火して、二階で寝ていた親子三人。僕はそう聞いてますけどね。

そうですね。彼女の遺体は見つからなかったみたいです。だからといって、こんな写真見せられても。

うーん、たぶん違うはず。もう大丈夫ですか？

【土演記録】

DIVEプロデュース

『メイド・イン・ジャパン』

【作】土橋淳志 (A級MissingLink)

【演出】笠井友仁 (エイチエムピー・シアターカンパニー)

【出演】川上珠来 (オイスターズ愛知県)

西藤将人 (劇団ハタチ族／島根県)

佐々木誠 (匿名劇壇／大阪府)

清水友陽 (劇団清水企画／北海道)

下川友梨 (劇団ひまわり／大阪府)

高安美帆 (エイチエムピー・シアターカンパニー／大阪府)

野々下孝 (仙台シアターラボ／宮城県)

ムーベ (ワタナベエンターテインメント九州事業本部／福岡県)

★ダブルキャスト

倉バージョン

しゃくなげ謙治郎 (爆劇戦線和田謙二／京都府)

土肥希理子 (京都府)

黒バージョン

野村由貴 (大阪府)

真嶋秀典 (劇団ひまわり／大阪府)

【日程】2017年2月2日 (木)～6日 (月)

【会場】ウイングフィールド

スタッフ

舞台監督 今井康平 (CQ)

舞台美術 笠井友仁 (エイチエムピー・シアターカンパニー)

照明 海老澤美幸

音響 近松祐貴 (オリジナルテンポ)

音響オペレーター 廣岡美祐 (フキゲキ/劇団 劇団)

衣装 植田昇明 (kasane)

イラストとチラシデザイン チャーハン・ラモン

舞台写真・映像撮影 堀川高志 (kutowans studio)

演出部 植田宏美・坂本隆太朗 (がっかりアバター)

森田祐利栄 (エイチエムピー・シアターカンパニー)

中国語指導 高嘉昱/沖繩ことば 仲道康貴 (koyR)

制作 尾崎商店

協力 IKSALON表現者工房・前田瑠佳・出口弥生・イロリムラ

株式会社 コモーション・舞夢プロ・(公社)HMP・劇団太陽族

助成 芸術文化振興基金・大阪市

主催 NPO法人大阪現代舞台芸術協会 (DIVE)

ウイングフィールド提携公演